

説教 『 真実のまぼろし 』 山本 護牧師
聖書 ヨエル書 3:1~2 / ヨハネの黙示録 21:1~4

「黙示録のような不可思議な書がなぜ聖書にあるのか」と怪しむ人がいる。その半面、教会史のあらゆる時代に、ヨハネ黙示録に支えられた多くの信徒がいた。彼らはこの奇怪な表現の何に支えられたのか。著者のヨハネという人物はめくるめく幻像を表し、苛烈な迫害を受けている七つの教会をつなぎとめた(黙示 1:4~5)。黙示録のヴィジョンは、禍々しい話ではなく、確かな現実であった。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た(21:1)」。ヨハネはパトモス島に幽閉されていたが(1:9)、意気消沈してしまわない。彼は幻視し(21:2)、預言者のごとく玉座からの啓示を聴く。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいてその神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる(21:3~4)」。神側からの約束と働きかけ。これを聞き取った七つの教会の信徒は、暗黒の日々にあつて、虚無に押し流されず、新しい創造の希望を描いた。

それにしてもなぜ、奇怪な表象が連綿と続くのか。暗号化された人名や事象が考えられる。例えば数字「666(13:18)」はヘブライ語で読み解けば「皇帝ネロ」になり、ローマ帝国への抵抗が隠されている。とは言っても黙示録の力は、読解された意味性と別ではないか、と私は想像する。つまり怪奇な幻像がまた次の幻像を生じさせるようなイメージの連鎖それ自体が、キリスト者を支えたのだ、と。

「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る(ヨエル 3:1)」。幻とは、苦難の中で主の霊に助けられ、忠実であることの実感なのだ。「その日、わたしは、奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ(3:2)」。力によって奴隷にされても、性別に関係なく、己が心は神のもの、我が主体は霊そのものだ、という信仰は、何びとにも支配されない。

黙示録は、単なる弾圧だけでなく、帝国の文化によって生ずる悪をも告発する。「全地はこの獣に服従した(黙示 13:3)」。強者に、多く的人是易々と屈服する。「人々はまた、この獣をも拝んでこう言った。[だれが、この獣と肩を並べることができようか。だれが、この獣と戦うことができようか](13:4)」。自衛隊を米軍の予備軍にしたい日本政府もこの類だ。経済もまた同様。「すべての国の民は、怒りを招く彼女のみだらな行いのぶどう酒を飲み、地上の王たちは彼女とみだらなことをし、地上の商人たちは彼女の豪勢なぜいタクによって富を築いた(18:3)」。富を極端に偏らせ、一方で貧困を拡大させる国際金融の仕組み。黙示録は、武力と結んで甘い汁を吸うこうした経済形態をも告発している。

「神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの涙をことごとくぬぐいとってくださる(21:3~4)。「嘘だ、現に今、俺たちの涙は流れているではないか」と抗議する人があるだろう。そうだ、私たちの目に涙は確かに「ある」。だが神は自ら人となり「今ここに流れている涙」を拭い取ってくださる。「もはや死もなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない(21:4)」。死はある、悲しみはある、嘆きはある、労苦はある。しかし自ら人となったキリストがここにおられるゆえ、私たちは死にさえ支配されない。ヨハネは少し先んじてこれを見ている(21:2)。私たちは諦めずに「真実の幻(ヨエル 3:1)」の希望を待つ。

やがて来る時をいま掴め 凝視して分らぬなら ぼんやり見るがいい 十字架の幻はどこにでも刻まれている 扉の細工に 足許に落ちた影に 自ら唱える微かな祈りの声に 探してみるがいい